

別科日本語研修課程 この一年及び次年度に関連させて

松嶋 緑

I. はじめに

別科日本語研修課程(以下、別科とする)では、2004年度21名の学生を受け入れ、一年間、活動を行った。本報告では、その活動概要を報告するとともに、最後に、特記事項として、次年度に関連して変更がある二点について記した。

II. 2004年度活動報告

2004年4月5日から2005年1月21日まで前・後期合計34週、毎週月曜日から土曜日まで、三クラスに分かれて授業が行われた。以下にその詳細を記す。

1. 年間活動(学年歴)

- 4月 入学式(対面式)、ガイダンス、前期授業開始
- 5月 親睦会
- 6月 課外活動
- 7月 前期集中授業、前期末試験、前期授業終了
- 8月 (夏季休暇)
- 9月 後期授業開始
- 10月 学部推薦入学の推薦者決定、留学生研修旅行(北陸地方)、国体
- 11月 (大学祭による休講)
- 12月 交流会、(冬季休暇)
- 1月 後期末試験、後期授業終了、補講
- 2月 修了者判定会議
- 3月 別科修了者発表、別科修了式、(春季休暇)

2. 学生とクラス構成

学生は総数21名(うち男性8名、女性13名)が一年間在籍した(定員20名)。

その出身国の内訳は、以下である。

- 中国: 18名(男6名、女12名)、
- バングラディッシュ: 2名(男2名)、
- コンゴ: 1名(女1名)。

なお、環境創造学部環境創造学科在籍の留学生(トンガ)が聴講生として4月22日より1月21日まで在籍した。

クラス編成は、4月入学時に日本語・英語クラス分けの試験2種を行い、日本語のレベルによって3クラス、英語のレベルによって2クラスに分けた。日本語の各クラスはレベルの低いほうからⅠ・Ⅱ・Ⅲとし、授業期間中、本人の希望及びその必要性が認められた学生に対し、クラスの移動を行った。また、英語の各クラスは同じくA、Bとした。

授業終了時の日本語各クラスの人員は、以下であった。

Ⅰクラス：5名（中国：2名、バングラディシュ：2名、コンゴ：1名）

聴講生1名

Ⅱクラス：10名（中国：10名）

Ⅲクラス：6名（中国：6名）

3. 授業について

授業は90分授業を1コマとして週当たり日本語16コマ、日本事情1コマ、英語2コマ計19コマ行った。各科目は全て必修科目である。授業時間の区分は、毎日午前9時20分～10時50分までが第1時限目、11時10分～12時40分までが第2時限目、昼休みをはさんで13時30分～15時までが第3時限目、15時20分～16時50分までを第4時限目と定めている。また、授業時数は月曜日から金曜日までは午後まで（但し第4時限目までであるのは火曜日と木曜日のみ）、土曜日は第二時限目までとなっている。

4. 各クラスの授業概要

1) 別科としての方針

本学別科における日本語教育を実施するに当たって、年度始めに次の3点を別科全体、つまり各クラス共通の基本方針として確認している。

1. 初期の学生に対しては文法や文型を中心とした授業を行い、授業が進むにつれて、徐々に文法から、内容を重視、トピックを中心とした授業に移行していく。
2. 別科の日本語教育の基調として、いかに表現するかということよりも、「理解」することに重点を置く。
3. 学習の焦点が、細部から全体へと広がるように授業を進める。

2) レベル別各クラスの授業について

Ⅰクラス

1. 使用教材：

主教材

- ・「みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ」
- ・「みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ 初級で読めるトピック25」

その他の教材（読解、聴解の時間に使用）

・「読みへの挑戦」

・「みんなの日本語初級Ⅰ 聴解タスク」、「毎日の聞き取り 50 日初級上・下」から任意に抜粋した。

2. 授業概要

<クラスとしての授業目標>

日本語学習経験がほぼまったくない学生たちであった。しかし、彼らに対しても、1 年間で学部の授業についていくだけの最低限の力をつけていかなければならない。そのために、まず、音声としての日本語の語彙及び文を理解すること、文字の識別ができることを第一目標とした。次に、初級文法項目の習得を目標とした。

内 容：

授業は、嘱託講師 3 名のほかに非常勤講師 3 名の計 6 名で、リレー形式で行った。午後、火曜日 3 時限目以外は嘱託講師が担当した。なお、Ⅰクラスの場合、授業は、前期より後期 1 2 月初めまで主教材である『みんなの日本語』Ⅰ・Ⅱ、それに関連する聴解や読解を行った。従って、前・後期の区別は特に記さない。

<午前授業>

午前授業は、原則として、第 1 時限目を前日までに導入を済ませた課の復習と練習の時間、第 2 時限目を新しい学習項目の導入・確認練習の時間とした。

今年度は、漢字圏 2 名と非漢字圏 3 名（後に聴講生を加え 4 名に）の混合クラスであったことから、初期段階から聴解力を中心とした総合的な力を養成することを目的として、土曜日を除くりレー授業の導入時（第 2 時限目）に通年で、従来の教科書を使う授業と並行して、TPR（Total Physical Response）を中心とした聴解優先指導法を取り入れた指導を行った。期間は 4 月～1 1 月で、主教材第二冊に入ってから、必要に応じて不定期に行った。なお、後期終盤、つまり初級主教材がほぼ終わる第 48 課に入ってから、第 1 限目は「みんなの日本語初級Ⅰ、Ⅱ 初級で読めるトピック 25」（必要に応じて教科書「問題」の読解問題も行った。）の第 24 課から第 50 課までを、書かれている内容の把握を主体とした、復習を兼ねた「読解」、第 2 限目に、主教材が終了するまでは教科書第 48 課から、教科書修了後は、週間試験の問題形式にしたプリントを用いて、文法項目の復習を行った。

<午後授業>

午後授業のうち、火・木曜日 4 限、及び金曜午後の授業は嘱託講師が担当し、主にリレー授業を展開していく上で復習や補いの必要がある場合の復習・補足、及び復習と確認のための「週間試験」を実施し、翌週はそのフィードバックを行った。このようにして、文脈からの文型表現、文法の定着をはかった。後期には、必要に応じて不定期に、最小不可欠な「作文」の知識導入と書き方指導を行った。また、1 回しか出来なかったが、日本事情の一環として、ビデオの授業も行った。その他、後期に入っ

てからは、学生からの要求もあったため、「復習」の時間に、「漢字」も指導した。内容は、「みんなの日本語II」第26課から、読み方を中心に行った。これには副教材「みんなの日本語II 漢字練習張」を使用し、「週間試験」の出題範囲に取り入れた。また月曜日3限目に「聴解（聞き取り）」を、火曜日3限目に「読解」を、4月と連休明けから、教科書と並行して行った。これも、早いうちから4技能をレベルアップさせていくために試みたのだが、二時間とも、その内容の詳細は、担当するそれぞれの講師に一任した。

<週間試験>

週間試験は、①それまで学習してきた文型及び文法項目・語彙の復習、②既習文法項目が文脈から理解できているか、を観点として、原則として毎週行った。翌週、その返却とフィードバックも行った。

3. 一年間を振り返って：

学生は、全体的には、非常に明るく積極的に授業に取り組んだといえよう。当初の目標どおりに4技能の各分野で基礎項目が終了でき、さらに、完全とはいえなくても、自身で発話の構築と産出が出来るようになった者はクラス6名中、約半分にとどまった。総じて、相手と聴いたり話したりしながら意思を伝達できるという、最低のコミュニケーションをすることは、1名を除き、ほぼできるようになったといえよう。また、比較的自然な話し方も身についたと評価できる。さらに、非漢字圏が多かった中で、読解に対しても、嫌がらずに積極的に取り組む姿勢が見られた。しかし、限られた時間内で、教員の側で意図した教授項目と学習方法を、学生すべてにまんべんなく伝え、かつ、理解させることが出来なかったということは、今後の指導上の課題として考えて行かねばならないだろう。

担当：松嶋（担任）、石井、福嶋、大河原、清水

（担当：松嶋）

II クラス

1. 使用教材：

- ・「みんなの日本語初級I、II」及び本冊シラバスに準拠した、語彙・文型の練習用のプリント「ことばを覚えましょう」及び「週間試験」を独自に作成して使用した。
- ・「みんなの日本語初級I、II 初級で読めるトピック25」及び本冊の各課に対応した、語彙・表現の練習用のプリント「ことばを覚えましょう」を独自に作成し使用した。
- ・「大学・大学院 留学生の日本語 ①読解編」
- ・「毎日の聞き取り50日上、下」、「毎日の聞き取りプラス40上」及び補助教材として、各課に対応した語彙・文型リスト、ひらがなと漢字かな混じり文の2種類のスクリプトを用意した。

2. 授業概要

<クラスとしての目標>

IIクラスの学生10名のうち8名までが来日前の自国での日本語学習経験が200時間前後であり、日本人教師による日本語での授業の経験は無かった。そのため、多少復習も兼ねて、教科書の第1課から始めることとした。また、一年間を通じた目標として以下の2つ設定した。

①「初級」用教材（「みんなの日本語」）で取り上げられている文型・文法事項と基本的な語彙を一通り習得すること。

②その上で、それらを活用しながら、全体的な文脈の中で理解し表現できる能力を身につけること。

そこで、初級文型・文法事項の学習は、できるだけ前期終了時までにはほとんどを終了し、夏休みをはさんだ後期からは、理解のための語彙を増やすと同時に、より広い文脈で文章全体を捉えるための練習に費やすことを目指した。

内 容：

授業は、嘱託講師3名のほかに非常勤講師3名の計6名で、リレー形式で行った。

<前期授業>

原則として、1時限目を前日までに導入を済ませた課の練習の時間とし、2時限目を新しい学習項目の導入の時間とした。

また、午後の3、4時限目の時間では、午前の進度の調整及びそれまで学習してきた文型・文法事項の復習に当てた。また、週間試験もこのとき行なった。

<後期授業>

原則として、1時限目は、読解教材を使用しての初級文型・文法事項の復習と語彙の拡張。さらに、文章を構造的に捉える練習も行なった。

2時限目では、聴解教材を使って、語彙や表現の提示、練習をしながら、音声による文章を、特にできるだけ少ない試聴で全体的な要点を捉える練習を行なった。また、午後は、初級文法、語彙の確認や作文などに費やした。

<週間試験>

週間試験は、主教材「みんなの日本語」の各課の学習項目に準拠したものを独自に作成した。試験と言っても、目的は評価というよりも、学習活動の一貫として捉え、教科書を復習し、問題の中の意味の流れを理解しなければならないような内容とし、解答欄だけを見るのではなく、常に全体的に問題や課題を眺めながら問題を解くような形にした。また、そうした問題の解き方も指導した。

形式は、書き取りと穴埋めの2種類のみとし、答え方の指示の不明確さを避けた。

3. 一年を振り返って：

全体的には、こちら（教える側）の「全体の文脈をつかみながら理解する」というメッセージは、学生側にも伝わったのではないかと思う。また、分かるということが表現の意欲にも結び付いた学生も少なからず見られた。その一方で、学習の成果が十分に見られなかった学生も1、2名（10名中）ほどあり、そうした学生に対しては、もう少し時間に余裕を持った学習が求められる。

今後は、さらに実際の大学での講義に近づけた状況や教材による授業や練習が必要となるであろう。

担当：大河原（担任）、茜、井上、塩田、松嶋、清水（担当：大河原）

Ⅲクラス

1. 使用教材：

- ・「みんなの日本語初級Ⅱ」
- ・「みんなの日本語 初級Ⅰ・Ⅱ 初級で読めるトピック25」
- ・「テーマ別 中級から学ぶ日本語 改訂版」
- ・「テーマ別 中級から学ぶ日本語 ワークブック」の中の「速読」
- ・「毎日の聞き取りプラス40上・下」
- ・中上級者のための「速読の日本語」

2. 授業概要：

授業は前期・後期共に、午前は嘱託講師3名のほか、非常勤講師2名のリレー式で行った。午後は嘱託講師が担当した。

内 容：

<前期授業>

プレースメントと学生の日本語学習歴を参考にし、初級後半から開始した。既習者には復習となり未習者には挑戦となった。

午前：1限目に文法、2限目に既習文型を使った読解を行った。

午後：会話にはビデオを使用し、教材に添って既習文型の確認と理解、その運用を練習した。

作文はテーマを与え、それについて書き、それを発表させた。

<後期授業>

午前：初級後半は、前期で終了し、後期は、読解と聴解を中心とした中級に入った。1限目の聴解は音声教材を通して語彙や表現法を習得し、知識を得るという総合力を高めることを目標とした。2限目の読解は、精読中心で、文脈を捉えての文章理解、段落ごとの理解から文章全体の内容把握までを目標に指導した。

午後:新聞記事を読むことで生の日本語に触れさせる経験から日本語にチャレンジしようという姿勢を養うことに重点を置いた。「速読の日本語」を使用し、スキミング・スキニングの練習をした。

<週間試験>

前期は午後第4時限目に、それまで学習してきた文型及び文法事項の復習として週1回、週間試験を行い、文法、文型表現、語彙の定着を図った。

後期は、「テーマ別 中級から学ぶ日本語」1課終了ごとに読解・文法事項など総合的な力をみる筆記試験と、短い文章を読み、漢字かな混じり文で書き取らせ、かつ漢字には「かな」をふらせるという試験を、週1回、午前第1時限目に実施した。

3. 一年を振り返って:

今年度のⅢクラスは女子5名、男子1名で、6名中4名が1年以上の日本語学習歴があった。しかし2名はそれぞれ6ヶ月、3ヶ月であったため、一応初級後半から開始した。初めの1ヶ月位は2名の遅れが目立ったが、前期終了時にはその2名が抜群に伸びたという結果がでた。既習者にしても日本人の先生による日本語だけの授業はとて新鮮だったようだ(学生の作文によると)。後期になると6名の力が同じ程度になったので、授業も軌道にのってきたが、今度は各学生の得意分野がはっきりしてきたのが興味深かった。文法が得意な学生、速読が得意な学生、聴解が得意な学生、逆にそれらが不得意な学生という具合に。

とにかく学生は皆熱心で、勉強好きで、よく出席し(当たり前のことだが)教えていても教え甲斐のあるほんとにいい学生だったというのが担当講師一同の感想である。

担当:清水(担任) 小林、小田、大河原、松嶋 (担当:清水)

3) その他の授業

1 前期集中授業

別科の学習期間は1年間とはいえ、実質的な学習期間がかなり短い。そのため、少しでも多くの時間、授業ができるように、前期集中授業が設けられた。期間は前期授業終了後期末試験開始までで、嘱託講師がまとめの授業を行っている。2004年度は7月22日~27日にかけて、前期集中授業が行なわれた。

2 コンピュータ演習

毎年後期11月から学期末まで、毎週火曜日4限目「日本語演習15」の時間をコンピュータ演習の時間としている。これは、学内でのパソコンの使い方に慣れると同時に、日本語による入力(ローマ字入力)の練習を行うことを目的としている。具体的な授業内容は、まずパソコンでの入力の基礎を学ばせ、次に、それまでの授業やその他(夏季休業中の課題など)で学生が書いてきた日本語の作文をパソコンのワードソフト

を使って入力させた。同授業はパソコンの操作や入力方法を学生同士で学びあったりするだけでなく、コンピュータ教室の使用のサポートに来ていただいている本学情報センターの方に日本語で聞いたりして、普段とは異なる日本語の授業をすることになった。中国人学生にとっては、日本語による漢字の読みの学習にもつながった。また、コンピュータ室での三クラス一斉授業となるため、普段の教室とは異なる雰囲気でも日本語学習が出来た。

4) 試験

1 週間試験の実施

クラス毎に、原則として毎週、授業の一環として嘱託講師が行った。その詳細は各クラスの報告に記したが、同試験は、それぞれのクラスの担当教員が各学生の学習状況を知り、その後の授業を行っていく上での参考資料の一つとして利用された。

2 期末試験の実施

前・後期末(7月と1月)に、各クラスのそれまでの学習内容の復習とまとめとして、期末試験を行った。具体的な目的や意図、内容や形式については、各クラスを担当する嘱託講師が決定し、実施した。その結果は、学生の評価成績の参考資料の一つとして利用された。

3 統一試験の実施

全クラス共通の問題及び採点基準によって、年3回(7月、10月、1月)実施した。同試験は、実施時点での学生の日本語能力を見るために行った。7月と10月の試験結果は、学部推薦の際の参考資料として利用し、1月の結果は、各学生の、1年間の日本語力の伸び率をはかる一つの資料として利用した。

4 日本語能力試験の実施

本学別科では、(財)日本国際教育支援協会が主催する、日本語能力試験の1級または2級を受験することが学部推薦をする上での条件の一つとなっている。2004年度同試験は12月6日に実施され、別科生は、1級に2名、2級に20名が受験した。

5) 課外活動

1 別科親睦会 (5月14日)

昼休み～第3時限目に、以前に別科を修了し、現在本学学部で学んでいる先輩学生を招いて、昼食会を兼ねた別科親睦会を行った。この親睦会は、まだ来日もない学生が、学生の母語で、日本での生活や、別科での学習のこと、また学部生としての大学生活についてなど貴重な情報を得るいい機会となっている。

2 茶道体験学習 (6月22日)

日本の伝統文化を体験学習する一つの機会として、学内茶室において、茶道体験学習

を行った。これは日本語学科の関口伊都子助教授が別科生のために特別にコーディネートしたもので、まず、茶道の基本、及び茶室に関する説明を行い、その後、全員が飲み方の体験学習をした。この体験学習は、来日してまだ日が浅い学生にとって、貴重な体験となった。

3 研修旅行 (10月13日～15日)

本学別科では、本学国際交流センターが、本来は、本学に在籍する留学生全員を対象に参加者を募集して実施する「留学生研修旅行」に、課外授業の一環として、全員参加させている。2004年度は金沢・能登半島を中心とした北陸地方へ、2泊3日で行われた。学生は初めて、関東地方以外の日本を見、また、各地の観光や日本式旅館に宿泊するという、普段教室では味わえない貴重な体験をしてきた。他に、この旅行を通じて、別科生以外の留学生とも親しくなり情報交換をする機会ともなっている。

4 別科交流会 (12月24日)

別科生全員が、これまで書いてきた作文の中から一つを選び、他の学生の前で発表し、その後昼食会を行った。これまでの学生の学習成果を見る機会の一つとなった。また、少数ではあったが、別科修了生の先輩や、学部生の一部も発表を聞きにきていた。

6) 別科作文集の作成

別科では、1997年度以来、II-4.3)2 (P32) で述べた「コンピュータ演習」で出来た学生の「作文」を、冊子「別科作文集」として発行している。同冊子は、別科における一年間の学習の、具体的な成果の一つとして、学生本人や保証人の他に、別科生が推薦されて進む学部学科をはじめとする学内の各部署に配布されている。2004年度も、「コンピュータ演習」で出来た「作文」は、「別科作文集 2004」として発行された。

5. 学部推薦について 修了後の進路

2004年11月末までに2005年度学部推薦入試が行われ、これにより、本年度別科生のうち19名が、別科修了後、本学の各学部に進学した。学部推薦入試は、別科での成績、出席、及び本人の希望をもとに推薦者を決定し、各学科の事前審査の後、諸手続きを経て、最終的な入学が決定される。

本年度の学部推薦による別科学生の進路先を以下に記した。

外国語学部	英語学科 1名・日本語学科 3名
文学部	教育学科 1名
経済学部	現代経済学科 2名・社会経済学科 2名
経営学部	経営学科 5名・企業システム学科 4名
環境創造学部	環境創造学科 1名

6. 「別科通信」の発行について

2000年度以来、本学別科では、保証人との連絡誌である「別科通信」を発行している。これは、学生の別科における修学が円満になるように、保証人との連絡を行うことを目的としている。別科から保証人へは、学生の出席・学習状況その他情報を伝え、保証人からは、保証人の把握する学生の近況、及び別科への意見・問い合わせ・要望を寄せていただいている。同通信は2004年度も、4月、6月、10月、12月、2005年2月の計5回発行された。

III. 次年度に関連させて

1. 定員増について

2005年度入試より、本学別科の入学定員が、従来の20名から、30名に増員された。一方、法務局入国管理局は、2003年11月より外国人就学生・留学生への入国審査を厳格化する方針をとるようになった。従来、本学別科は、その募集人員そのものが多くなかったこともあり、大規模な募集は行ってこなかったのが現状である。しかしながら、この定員増と昨今の日本での留学生受け入れ状況の変化に伴い、今後は、募集方法について、検討改善する必要があると思われる²⁾。今年度までに行われた事項としては、具体的には、従来、本学国際交流センターのホームページに設けられていた別科の項以外に、「別科ホームページ」を新しく開設し、日本語以外に、中国語・韓国語による別科の紹介を掲載した。

2. その他

昨年度までの本学別科年次報告で指摘されている、本学学内における別科への認識・理解の問題、及び別科の日本語コース運営上の課題については、いろいろ指摘されているにもかかわらず、改善されていないのが現状である³⁾。これは、別科単独で解決していくことが出来ない問題があり、大学全体の視点から考えた改革の早期実現が望まれる。

IV. 終わりに

以上、2004年度の別科の活動を報告するとともに、昨今の留学生をとりまく入国管理局の政策変化に伴い、次年度に関連させて重要だと思われる問題について考えた。

振り返れば、今年度の別科生の通年の出席率は例年に比べて著しく良くなった。これは、受け入れの厳格化に伴い、学生の質が向上したことにもよるが、その一方で、出席率がよくないとビザの更新が厳しくなるという受け入れ政策の変化を如実に反映しているといえよう。特に、別科の募集と実際に許可される人員の問題は、別科の存続にもつながる問題なので、より開かれた募集をしていくような改善策が急務であろう。

最後に、II-4. 2) の各クラスの授業についての報告は、II・IIIクラス担任の大河原・清水両嘱託講師からそれぞれのクラスの授業報告を出していただいた。

註

- 1) 「英語」は水曜日第 2 時限目と木曜日第 3 時限目、「日本事情」は木曜日第 4 時限目としている。
- 2) 2003 年 11 月より、法務局入国管理局より、従来行ってきた外国人就学生・留学生への入国審査が厳格になった。それにより、2005 年度別科入試において、応募者の減少が見られた。また、大学機関への在籍管理も厳しくなり、ビザ更新に伴う手続き書類が複雑化した。さらに本年 1 月、同局より、入国審査の再改訂が行われた。
- 3) 大河原（1999）「別科の現状と今後の課題」『別科論集』創刊号、大河原（2004）『別科日本語教育』第 6 号に諸問題点の詳細が述べられている。